

中川皓三郎助教

『阿弥陀経』を読む 平原晃宗講師

『親経疏』を読む 三木彰円専任講師

『唯信鈔文意』を読む

藤嶽明信助教

『正信偈』を読む 松井憲一講師

海外の宗教学者の真宗観にふれる

井上尚美講師

『教行信証』「坂東本」を読む

一楽 真助教

『定本教行信証』を読む

藤嶽明信助教

真宗学演習Ⅰ（一回生）

『真宗学』とは何か・親鸞の生涯

一楽 真助教

木越 康助教

中川皓三郎助教

真宗学演習Ⅱ（二回生）

『選択本願念仏集』を読む

木越 康助教

中川皓三郎助教

三木彰円専任講師

真宗学演習Ⅲ（三回生）

『歎異抄』

『歎異抄』

『歎異抄』

神戸和麿教授

安富信哉教授

延塚知道教授

『歎異抄』

『歎異抄』

『歎異抄』

真宗学演習Ⅳ（四回生）

『歎異抄』

『歎異抄』

『歎異抄』

『歎異抄』

『歎異抄』

藤嶽明信助教

加来雄之助教

一楽 真助教

神戸和麿教授

安富信哉教授

延塚知道教授

藤嶽明信助教

加来雄之助教

一楽 真助教

### 編集後記

清沢満之先生の百回忌を迎えた二〇〇二年度の『親鸞教学』は、「清沢満之没後一〇〇年特集（一）」八〇・八一合併号としました。

今村仁司氏の「清沢満之における縁起の概念」は、二〇〇一年度の真宗学会大会の講演をもとに書き下ろされた論文です。今村氏には発表後、日を置かずして原稿を頂き、ありがとうございます。氏はつねづね満之の思想課題を仏教縁起論の再構築であると指摘されていますが、その清沢の構想の中核である「縁起」の概念をさらに展開するならば、という刺

激的な論考です。

寺川俊昭氏の「大谷派なる宗門は大谷派なる宗教的精神の存する所に在り」は、臘扇忌（百回忌）法要初日の講演記録に加筆訂正いただいたものです。大谷派宗門が「人類の求道の場となる」ことこそ満之が宗門に願ったことであり、またそれを果たし遂げんとすることが彼の使命であったとする講演でした。

小川一乘氏の「大谷大学の役割―満之における近代化―」は、二〇〇〇年十月二十五日に厳修された臘扇忌の講演記録に加筆訂正いただいたものです。大谷大学長として「大谷大学近代化百周年」をどう受け止めるべきか、また大谷大学の役割はなにかを、「ヒューマニズム批判」をキーワードに確認する講演でした。小川氏には大学公務で多用のなか校正いただきありがとうございます。

合併号の巻頭論文は神戸和麿氏の「清沢満之の名号論―如実修行相応―」です。満之には念仏がないという通俗的な疑難に答え、満之の念仏観が「浄土論」などに基づく親鸞の伝統に立つものであったことを明らかにするものです。

中川皓三郎氏の「歡喜と慶喜」は、満

之の「他力の救済」を憶念しながら、念仏が与える宗教的なよろこびとは何かを『歎異抄』第九章を中心として確かめる論文です。

延塚知道氏の「真宗大学開学の精神」は、今村氏と同じく二〇〇一年度真宗学会大会における講演記録に加筆訂正いただいたものです。当時、氏は「大谷大学百年史」編集の責任ある立場にありましたが、その成果を受けて「他の学校と異なる」一点を検証するものです。

本学任期制助手・橋田尊光氏の「清沢満之と真宗大谷派教団―白川党宗門改革運動をめぐって―」は、満之が真宗大谷派の教団人として生きた意義を確かめる論文です。

また本号には、本学非常勤講師の平原晃宗氏の「疑惑和讃」試解」と真宗大谷派教学研究所助手の鶴見晃氏の「教法を問う―教法の現実性と時機観―」を掲載しました。

また学会彙報の「臘扇忌(百回忌)法要報告」は、二〇〇二年六月四日から六日まで三日間にわたり大谷大学で勤められた清沢満之百回忌法要の報告です。あわせて最終日の実行委員長・安富信哉氏

の法話を収録しました。

曾我量深先生が満之の教学について「師は何等の結論を与へられなかつたか」第一歩の方針を与へられた(「中略」)先生は何等学説を教へられなかつた先生は未成品であつた。大器晩成とある絶大の器は永久の未成品でなければならぬ(明治四十四年ノート、「宗教の死活問題」後記所収)と語っている。満之の一言一言が否みがたい權威をもっているのは、そこに答えがあるからではなく、内なる矛盾も外の状況も矛盾を矛盾として見据え決してごまかそうとしなかつた誠実な問いがあるからだと思う。満之がなそうとした教学(とくに「臘扇記」以後)は、一つの出来合いの解答を与えるものではなく、人生の歩みに根源的な方向を指し示そうとするものであつた。近代を生きたる仏教者として親鸞の教えに出会うとはどのようなことか。ただそのこ

特集を組むことになった。特集の名称については、先の生誕一〇〇年特集号をうけて「清沢満之没後一〇〇年特集」と決め、単発的なものではなく、少なくとも二カ年にわたり、その確認の作業を行っていく予定である。次年度は没後一〇〇周年として八二・八三合併号とする予定である。

臘扇忌報告にも言及されているように、大谷大学編集『清沢満之全集』全九卷(岩波書店)の刊行が二〇〇二年親鸞聖人御命日より始まった。この度の全集は、清沢先生面授の人が存在しないなかではじめての編纂となる。全集編纂作業に携わる一人として、出版ということの厳しさを思い知らされている。真宗学会が『親鸞教学』を公刊していく願いの深さと責任の重さをあらためて銘記し、できるだけ誠実に編輯実務を果たしていきたい。(二月一日 加来雄之記)

との第一方針を示すために生涯を賭けられたのである。それから一〇〇度の霜雪を経た。真宗学会では、この清沢先生にはじまる「近代親鸞教学」の意味を問い直したいと思ひ、『親鸞教学』において